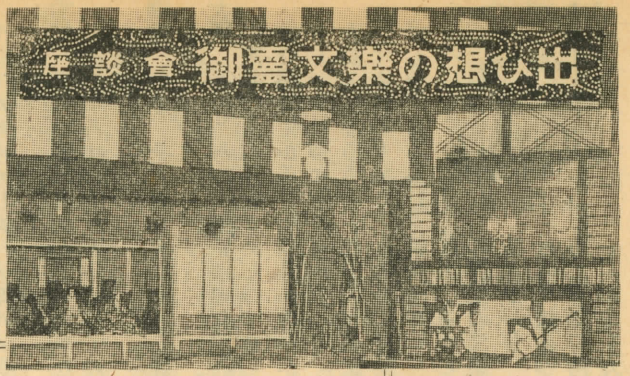
御靈文樂の想ひ出　座談會



御靈の日の床、面、舞臺の樂屋は越路太夫、三代目鶴澤寫眞は太夫

座談會「御靈文樂の思ひ出」はあらゆる方面の明治文物がもう既に過去の記憶に消えさらうとしてゐる時、御靈時代の文樂についても殆ど文獻らしい文獻がないので、せめてこの程度でも活字にして殘したい意圖から催してみた。

出席者　豊竹山城少掾
竹本大隅太夫
鶴澤清六
鶴澤清八
鶴澤綱造
木谷蓬吟

日時　十一月中旬

場所　大阪文樂座貴賓室

御靈文樂が燒けた時

木谷　實際もう『御靈の文樂』といつても知つてゐる人は少くなつたでせうね……今日五十歳がらみの人でないと……少くとも……

山城　燒けたのが大正十五年十一月二十九日の夜でしたから……もう二十三年前になります。ほん昨今のやうな氣でをりますが……

清六　てうど、その翌月の十二月が東京行きでしたので、人形や小道具をだいぶんに荷造りしてあつたので、かなり助かりました。それが、まア不幸中の幸でしたやろ……

清八　そうだす、あれは樂の晩でしたさかい。駈けつけた座方のものが皆んな荷物をかついで持つて歸りましたので、相當助かつたやうだした。

山城　たしか夜中から燃え出して、晝前まで燃えてゐました。えらい火だつたので、唐物町の堺卯（料亭）へ飛び火して、これも大騒ぎでした。

大隅　てうどその夜、私は河内の在所へ行つてましたが、翌朝に天王寺驛へ降りると、いま文樂が火事やといふことで、びつくりしました。わが

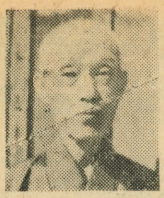
家が燒けてるやうな氣持で、心臟の鼓動がワク〳〵して……えゝ、すぐ小屋へ駈けつけました。

清八　私はてうど、その朝、休みになつたので村上さん（津太夫）と一緒に「寺小屋」のレコードの吹込みをやつてた最中だした。火事やと聞いたのは……

木谷　出火の原因は何んでしたかな……そのころは漏電だといはれてゐましたが……

綱造　いや、そら違いまつせ……蠟燭かランプの火からだす……

大隅　あのころの文樂座は客席（土間）の天井の上が物置きになつてましたので閉場てから、大道具か誰かが、カンテラ持つて天井裏へ上つて、何か探してるうちに、火が大道具に移つてゐたのを知らなかつたのやさうでした。なんかし、眞ツ暗やし、それに、そのころの文樂の樂屋は道具が一杯、そこらに轉がつてゐて、隨分汚ないものでしたさかい……



木谷蓬吟氏

綱造　天井裏には、大道具の切出しの櫻や楓の木が、ぎようさん置いてありました。ソラ木の葉に脂を塗つた……あんなものに火が移つたんやから、一ぺんだす……

大隅　私の聞いたのは、その大道具の者がアツ火が移つたと思つたとたん、大聲で火事やといつて助けを求めたらよかつたのだが、自分で消さうと思つて下へバケツで水を汲みに行つてる間に火が廻つたのやとも聞いてゐます……

山城　とにかく早いものです、もうあれから二十三年になつたのですから……

木谷　文樂座が松島から御靈社内へ移轉したのが明治十七年九月興行からですから、大正十五年に燒失するまで四十二年間ですな、御靈時代の文樂は……

本床の下に壺

清八　昔の文樂の樂屋は、建ものが古いだけに、ほんまにきたなおましたな、薄暗うて……きたなうて……それにどこも天井が張つておまへんさかい、梁も棟木も丸出しで、それが燻つて眞黑だした。ソヤ、三階の大部屋に「うし」といはれる太い梁が天井から斜めに出てましたな、あわててその下を通ると、ゴツン〳〵頭うちました。われ〳〵仲間では「えらい三味線引きになるおもたら、この「うし」に何百遍何千遍も頭うたんならんもんや……」いうてました。

山城少掾氏

清六　御靈の樂屋は、實に今から思ひ出しても、お粗末なもんでした。

木谷　御靈文樂の舞臺間口は幾間ぐらゐでした、な……あれで。

山城　七間でしたでせう。

綱造　七間より少し狹かつたのと違ひますか。

山城　いや七間はあつたでせう。

木谷　客席は七八百ぐらゐ？

山城　えゝ七百五十程度ですか、大體今日の四ツ橋の文樂と同じぐらゐだつたでせう。尤も今の四ツ橋の文樂を昔のやうに「桝」にすれば、もつと多くはいるでせうが。

大隅　舞臺の奥行はホン狹かつたやう

でしたな、五間も、とてもなかつたと思ひます。客席も今と違つて桟敷に出孫もおました。平場の桝は二人詰だした。

清六　床の下に大きい壺が伏せてありましたな……能舞臺みたいに……今の文樂ではこれありまへん。

清八　そや〳〵、わてら子供の時分、ようその壺をのぞき込んで、えらいもん伏せてあるで、とよくその中へ這入つて遊んでたものだした。（笑聲）

山城　昔は客席の上に張り天井がおませんでした。その時分は聲も三味線もよく籠りました。天井の出來たのは何時ごろでしたかな、私のまだ十代の時ですから、明治二十六七年ごろでせうか……

綱造　張り天井をこしらへたのは、警察からでも命令されたのだつしやろか、それとも小屋の體裁を上品にするためでしたのやろか、とにかく梁や棟木から塵埃がお客さんの頭の上へ落ちてゐたのは確かやから、衞生上で天井を張ることになつたのか……

山城　天井を張つてから、聲が籠らなくなつたので、私の師匠の法善寺（先代津太夫）が針金を幾筋も舞臺から客席の上へ張られました。

氏六清澤鶴

棟木に恥かしい

清六　針金は堀江座でも張つてゐました。あの小屋は文樂よりもずつと廣かつたので……まア針金を張ると神經で、よう籠ると思つてたんだつしやろ。

綱造　文樂の客席に天井が出來た時、よう覺えてますが、狂言は「ひらがな盛衰記」で大掾師匠（當時越路太夫）が松葉屋の廣助師匠の絃で「鐘場」を語つてはりまして、私が前の先代南部太夫を彈いてて、役場は「辻法印」の口だした。ええッと、その「辻法印」の後は染太夫さんやと思つてますが、その總稽古の日、私と南部さんとが床で稽古してると、大掾師匠（當時越路太夫）がうしろに兩手を組んで客席へのこ〳〵來られて、天井の張つてあるのを見あげながら「どうや、天井が出來たら聲の籠りえゝか」といつてゐられたのを覺えてます。なんせ、えらい師匠が横へ來はつたので、子供ごゝろにハラ〳〵してたので、よけい印象に殘つてますねんやろ……サア幾つぐらゐやつたか、私の十七八歳や思ひますから明治二十八九年でしたかしらん。

大隅　天井いふたかて、今のやうな格天井と違いました。普通の住宅の天井みたいな細い桟のはいつたやつだした。それに兩桟敷の上に明りとりの窓があり、ヒイキから贈られた小旗など出してありました。

清八　私ら子供の時分、また天井がない時、床で三味線彈きながら、仰向いて燻つた客席の上の棟木や梁を見てゐると、恐しうおました　私ら下手な三味線彈いてるが、この文樂の棟木や梁はこれまで、偉いお方の三味線をタント聞いてはるこツちやろ……さぞ、私らの三味線下手糞や思うて笑つてはるやろな……と棟木や梁に恥かしうおました。

大隅　實際、御靈文樂の舞臺は、なん

やしらん恐うおましたな……

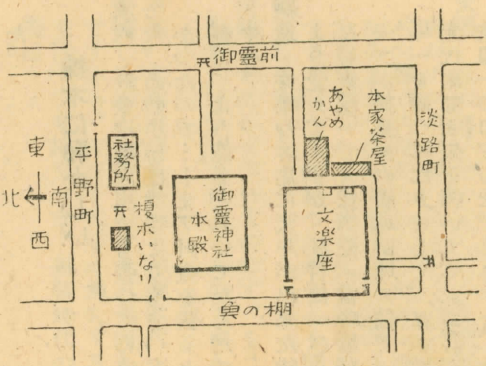
山城 それは本當です、御靈文樂の床は、ちよつと恐しいやうに思へて、氣が張りました。やはりえらい太夫が澤山ゐられたからです。

綱造 同感だす。（笑聲）

初代玉造の宙吊り

綱造 それから、あれはいつのことだしたか、文樂で引幕使うたらいかんいはれて、緞張幕に替へたのは……なんでも「加賀見山」が出てたと思ひますが、引幕は櫓のあがつてゐる小屋だけに許す。文樂には櫓がないから不可ん、とかいふてましたが、文樂こそ櫓の本元で、それをいふて反對したらええのだすが、紋下の大掾さん（越路）があんな圓滿な溫和しい人だしたから……なんにもいはず、それからズツと緞帳になりました。

それから、この天井が出來てから、初代玉造はん得意の宙吊りが出來んやうになりましてん。張天井が邪魔になつて仕掛けが出來まへんので……そら、玉造はんの宙吊り早變りは見事なものだした。「大江山酒呑童子」などやつたら童子になつて宙吊りになり客席の上へ來て「龜」になります。「龜」といふのは腰と首筋と二つ針金が引つかけてある。その首のほうを一本、宙吊りしてる最中に離すんだす。すると、人形を持つてる玉造はんの身體が「龜」みたいな、腹蒲ひしてるやうな形になる。お客は落ちるかと思つてハツと吃驚しますのんだす。そのほか、いろ〳〵趣向をこらしてやられました。「天拜山」やとか「五天竺」などで、岩の上から平場の上へビューツと、ぶらんこみたいなこともしやはりましたな……



山城 「五天竺」や「大江山」のやうな宙吊りものいま出來んか知ら……面白いのですがね。

綱造 死んだ榮三はんが、こんな早變りや宙吊り嫌ひだしたから……あの人はとうない用心深い氣の小さい人でしたから……

山城 榮三はんが嫌やがつてゐたにしても、今なら誰でも演るでせう。一度かういふ狂言も出したいものです。

町藝者にいたづら

木谷 話が違ひますが、御靈神社の界隈は賑かな盛り場でした。その思ひ出を誰か……

山城 御靈さんの西裏手に當る通稱「魚の棚」には手毬を投げて人形を倒す遊戯場がありました。

大隅 鰻屋の「巳の庄」天婦羅屋の「天虎」

山城 境内にも手品師がゐたり、紙切

り（これは兩端を引張つた紙片を剃刀で切る遊び）がゐたり露天商人が澤山をりました。

清八　法善寺の師匠（先代津太夫）の部屋が、この魚の棚に面してゐましたが、そのころ大阪には町藝者が澤山ゐまして、てうど魚の棚の、法善寺の師匠の部屋と向ひ合せに一軒ありましたが、われわれ子供たちが、この町藝者が二階で化粧でもしてゐると、鏡でその顏を照して悪戯しますねん。師匠の部屋は西日が眞正面に這入りますので、それを鏡に反射させると、うまいこと町藝者の家に當ります。とうないその角度がよかつたさかい。面白がつてようやりました。金杉さん（山城少掾）あんたかて、ようやつて師匠に叱られてなはつたやおまへんか。

澤清八氏

山城　よう叱られました。（笑聲）

清八　私が文樂へ這入つたのは明治二十三年でした。金杉さんは、

山城　私は二十二年やとおもひますが……

賑やかだつた御靈さん

木谷　御靈神社境内の見取圖のやうなものを、どなたか思ひ出していただきませうか。

山城　御靈さんには周圍に六つ門がありました。東門が正面で、從つて神社の本殿は東向き、その東正門の南に小門一つ、これで東には合計二つ門があつたわけで、その前通りが賑やかな御靈前通りで、こゝからまた東へ淀屋橋筋へ抜ける小路があり、その小路の中に、すしやの二鶴や小料理屋の現長など食道樂街になつてました。それと東門の筋向ひに文樂堂といふ繪草紙屋などもありました……文樂の西、すなはち小屋の舞臺裏に面する通りは魚の棚で、境内へはいる小門が二つありました。その二つのうち南のほうは文樂の南側の塀に沿つて、カギ形に折れると文樂の正面へ出られました。北の小門を這入ると、榎の木さんといふお稲荷さんがあり、右へ回ると文樂の北側に突き當りました。魚の棚には前に申しましたとほり、天虎ゃ已の庄などやはり食べ物店がたくさん列んでました。それと、西の魚の棚と南の淡路町との出會ふ角、すなはち境内の西南隅に小さい寄席がありまして千日前の仁輪加の「お半小半」がよくかゝつてました。もつともこれは明治三十四五年ころには既になくなつてゐましたが……南の小門に石の鳥居があつて、その鳥居をくぐると左手に「神力」といふ人力車の帳場と壽司屋、右手に煎餅屋と「あづま」といふぜんざいやがありました。この「あづま」は確か後に本屋に變つたと覺えてゐますが、この角を右へ、すなはち東へ曲つて文樂座の南側に沿つて、左へ（北へ）カギなりに曲ると文樂座の表木戸へ出られましたが、それまでに花屋やかきもち屋や眼鏡屋やなどが右側、即ち文樂の南側に向つて列んでをりました。北は小門一つ、これを北へ出ると、こゝも賑やかな平野町通りで、小門を出た角に雜穀屋と八百屋があつたと覺えてゐます。それから、南門を入つたとこの「かき餅屋」、これは清七さんといふ文樂の表方のお内儀

さんがやつてゐたので、文樂座の菓子は全部これから入れてゐたものです。文樂座の表側は細い路次で、その路次を隔てゝ向ひ合せに本家茶屋がありした。

大隅　本家茶屋には表に大きい茶釜がドンと坐つてましたナ、客席へ運ぶ茶を沸してたのだす。煙草盆や火鉢を一パイならべて……本家茶屋ではお客の下足を預つてましたな。

山城　本家茶屋は二階づくりで、その二階でむかし久邇宮殿下が文樂へお見えになつた時、こゝで拜謁を賜つた思ひ出などあります。

清六　樂屋の入口は西側の魚の棚から小路を這入つたとこでしたナ……大道具部屋が西北の隅で……

木谷　文樂の東北角、道を隔てゝ「あやめ館」といふ寄席小屋がまた一つありました。これに富士川の錦影繪が常打ちしてゐました。

大隅　あの「あやめ館」の錦繪は大正の初めころまでありましたかな……

山城　その「あやめ館」がむかし土田の席といつてたのでせうかな。

清八　それは違ふかも知れません。土田の席といふのが、文樂の前身と違ひますか。

大隅　「あやめ館」の東へ、また食ひもの店が列んでましたな　ズツと御靈前まで……ぜんざい屋とか關東煮き屋とか……

大隅太夫氏

清八　今、山城さんがおつしやつた南門を這入つた角の「あづま」といふ小さいぜんざい屋へはよく子供の時分出掛けました。何分にも大序が開くのが午前六時ごろですさかい、樂屋へは五時ごろにはいつてねばなりまへんさかい、朝御飯をろくにたべてしまへん。お腹が空いて、よくこの「あづま」へ飛び込んで「おばはん、なんど食べるものないか」とセビつて食べさしてもらうたものだす。そやから、こゝは文樂の子供連の溜り場になつてました。死んだ津太夫さんも、その時分の「なんど食べさしてんか」の口でした。(笑聲)

大隅　けど、文樂の界隈も時代によつて違つてましやろな、私の知つてゐたことは魚の棚あたり大分に變つてましたから……明治三十八年の第二回內國博覽會時分……

木谷　御靈神社の界隈はいゝ遊興場所でした。昔は大阪の神社は大低この式の遊び場所で、堀江の「あみだ池」にも昔は寄席が二軒もあつたものです。

呂太夫さんの聲

清八　とにかく昔の御靈さんの界隈は食ひ物店や寄席小屋や遊び場や、隨分賑やかだしたもんだす。けど、やつぱり今と違つて市電も自動車もおまへなんだので、世間が總體に靜かだつたのやろ、ハラ〳〵屋の呂太夫さんの「大落し」が瓦町まで聞えたんですさかい……

山城　瓦町まではどうか知らんけど、平野町の角の魚岩といふ料理屋までは聞えてた。近所の人が「いま呂太夫さんの役場や、みな畫御飯にしよう」と、その聲で大體の時間が知れたものです。

清六　呂太夫さんの聲も大きかつたが、今のやうに街の中が雜音やおまへなんだから、自動車がブウ〳〵通りまへなんだからよう聞えたのも無理おまへん……

綱造　なんかし大阪中の乘物が人力車か巡航船だした。法善寺の師匠がよく横堀川を巡航船で來て樂屋入りしてはりました。

木谷　ハラ〳〵屋の呂太夫と先代七五三太夫とはどちらの聲のはうが、大きかつたでせうな、

山城　ソラちよつと比較出來ませんな、聲柄が全然違つてましたさかい。第一お二人のモノが違つてました。七五三太夫は息の短かい方でした。大きい聲ですけど、バンバラ聲でした。

清八　「菅原」の天拜山語つてはつて、裏で道具がガチヤ〳〵いふてるのに、文句がハツキリ聞えてました……

山城　彦六座時代の七五三太夫さんでは「誕生會」の苦行の場で「谷をへだてて」と語りはるその聲が、實にイヽ聲でしたのを覺えてますが、いつからあんなバンバラ聲になられたのでせうかな……

清六　そのころの話ですな、彦六座で道八師匠が友松時代、七五三太夫をひいてゝ、撥を質に入れてないもんですさかい、床へ上つて隣の撥ソツと借りて彈いたといふ話……（笑聲）

清八　「布引」の三段目の瀨尾で七五三さんが「九郎助とはおのれかツ」と語りはると、平場（土間）にゐた子供がその聲にびつくりしてウワーンと泣き出したものだした。

植村のおいえはん

清六　とにかく昔はものが安かつたものですな、あれで文樂が燒けるところでも、棧敷一人前二圓五十錢か……三圓にはなつてまへなんだやろ……

山城　昔は「立見」が大掾師匠の語られる一段で二錢、法善寺の師匠以下が一錢に決つてゐましたからな……それに呑ん氣なもので、私の子供のころは六十日節季で、二ケ月目にトクイ先へ場代を貰ひにいてました。

大隅　「立見」は幾人ほどはいれましたかな、狹いとこやつたから、せい〳〵二十人ほどでしたな。

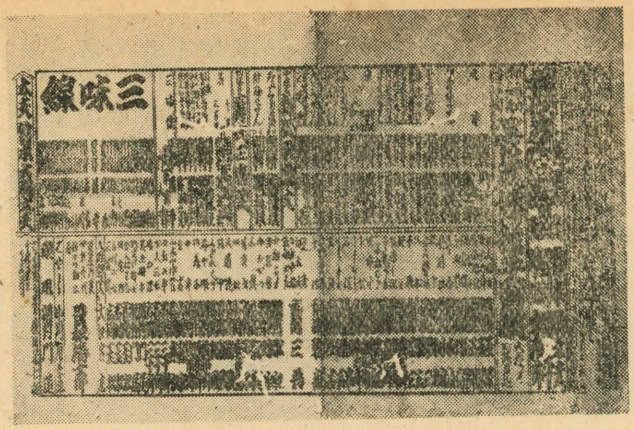
山城　木戸を這入ると、右手に勘定場があつて、大勘定の池上さんと渡邊さんとがその上に坐つてをられました。左手へ行くと本家茶屋の入口があり、そこに結界をおいて文樂の「おいえはん」即ち三代目植村の後家さんが表方を總指揮されてました。このおいえはんは小柄の方でしたが、なか〳〵美人で、また偉ものでした。よく氣がついて、お客への愛嬌も、客扱ひもよくて……

清八　文樂の「おいえ」はえらいお方でしたな、私らよう可愛がつて貰ひました。なんぼ團體のお客やいうたかて、一錢でも割引したら、あんたら藝人さんの値打が落ちるいうて割引しはりまへなんだ。ホンあいそのえゝお方でねて、確つかりしてはりました。その上、所作事の「團子賣」の人形の振付はこのおいえが手をつけはりましたんです。えらいお方でした。そやからわれ〳〵舞臺のものもおえはん、おえはんいふて皆な慕うてましたもんだす。美しいお方でいつも兩輪に結髮うてはりました。

山城　この植村のおいえはんは文樂が松竹になつた後もまだをられたと思ひます。私が古靱を襲名したのが明治四十二年で、この時に松竹へ身賣りしたのですが、そのころおいえはんはもう六十代でしたと思ひます。

大隅　その時分、表方とお茶子はん、何人ぐらゐでしたかな……

山城　あれで二十人ほどはゐましたでせうか。喜助はん、清七さんなど入れて……それからその時分、大掾師匠は語りものが濟むと、すぐお宅へお歸りになる。すると、この大掾師匠が歸られた後から入場したお客の



明治二十七年三月稻荷座の番附

上り錢は表方の收入になつてゐました。それが役得として大目に見て貰つてゐたものでした。

清六　大掾師匠が濟むところになると、座の表へ男衆が立つて「只今より何錢ですぜ、おはいりやす」と呼びながら客引してました……これは道頓堀でもおましたけど……

山城　表方の清七さんは、例の「かき餅や」を妻君に出させてたのですが、この人の係りは番附を賣るかゝりでした。梅毒で鼻が落ちてた……

大隅　立見の席は木戸を入つて左手の隅の平場の一番うしろでしたな、大きな柵がしてあつて……

山城　そや〳〵、うちの師匠など、よくこの立見を氣にされて、わしの聲、立見で聞えるかとよく私たちに尋ねられてゐました。それに立見の客、わしの淨瑠璃なんちうてたと、その評判をよく氣にしておられましたものです。

復活したい「鳥屋ぶれ」

大隅　南の隅と北の隅に「奥場」があつて、手代がゐました。それに案内の藤やんが「鳥屋ぶれ」してました……あの「鳥屋ぶれ」は今の文樂でも、一ぺん復活させたいものですな……

綱造　えゝもんだしたな……床へ上つて、三味線の拵らへしてゐる間、鳥屋ぶれの「何々太夫はーん」が舞臺の間をつないでくれます。鳥屋ぶれの聲が切れたころテンテン、テツ〻、テンと彈き出すのだす……もつとも私などは床へ上ると、すぐテンと彈き出すはうで、あまり拵らへに時間とるはうやおまへなんだが……

清八　ぐあいのええもんだすな……鳥屋ぶれがあると、オクリがぼん彈きようおました。

綱造　鳥屋ぶれは太夫が替つた時だけやなく「大落し」の時にもやりました。例へば「太十」の光秀の大落し「……ばかりなり」でも「越路太夫ハーン」とやるですが、これもとうない具合ひがよろしうおました。この鳥屋ぶれの聲が太夫の聲と一緒になつて客席一杯に響きますさかい、その餘韻が殘つて大落しが一層大きく聞えました。

木谷　今日の言葉でいふ演出ですね、一種の……よく考へたもので、立派

な演出の効果とでもいふのでせうな……

綱造 な、金杉さん、なんとかして、この鳥屋ぶれ復活出來まへんやろかな、面白おまつせ(笑聲)……それから落語でよくやりますが、昔はお客さんの通り札が木の札で一枚二枚と勘定してましたさかい「文樂は客を一枚二枚と勘定しよつて、自分とこの太夫には「何々太夫さーん」と、さんづけや」いうて……

山城 あれはハーンやなしに「何々太夫場」や、その「場」を長くひくので「ハーン」に聞えたのやろ……

木谷 復活出來れば復活したい。あれを聞いてゐると實にいゝ氣持になる。

清八 オクリを彈いてゐると、なほよろしい。デーンと撥が冴えて聞えます。

大隅 藤やん(藤吉)のほか、鳥屋ぶれするのがも一人をりました。

口上のヒゲカメはん

綱造 むかし「口上いひ」に龜やんいふ人がゐました。いつも毛拔きでヒゲを拔いてるので、みながヒゲカメさんいふてました。今日の兵次さんと一緒で人形遣ひで、その名を吉田玉壽といひ、初代吉田玉造さんの弟子だしたが、いつも「うちの師匠はえらいことといふても、動物を遣ふたら、わしに負ける、わしはエトの十二支のうち、まだ遣ふたことのないのは羊だけや」いうて自慢してました。それでも二代目の玉造はんが四十二歳で若死したときは泣いてました……えらい酒すきでしたが、カンピン一本二錢で飲んでました。それは酒屋の丁稚に文樂をタダ見せてやる、その交換條件で二錢にして貰うてましたのやろ……その証據に酒屋の主人が店に坐つてゐると、隱れてました。(笑聲)

鶴澤綱造氏

清八 このヒゲカメさん、そのころ守口から文樂へ通つてましたので、二時間以上かゝるというてました。

初午に怒つた廣助

綱造 これは話がちよつと違ひますが、御靈の時分には春の初午をにぎやかに祭りましたな、閉場てから舞臺の上で、お囃子がお手のものの太鼓をテンテコ〳〵たたいて、ぐるぐる列を作つてまわるのですが、或る年、廣助師匠が「お先登」になつてまはつてゐるうちに、誰か惡戯な子供がその列を力まかせに押したので、みんな將棋倒しになり「お先登」の廣助師匠も前のめりに仆されはりましたので、えらい怒られて「こゝにゐるもの皆クビや」と宣言されて皆んな蒼うなりましたが、たま〳〵その夜は大雨だしたので、われ〳〵クビの連中も歸れまへん。みんな小屋で泊まることになりましたが、これが「手」でかうして一晩とまつてゐるうちに、表方から挨拶があつて、やつと一同カンニンして貰ひました。「すつくりいた」いふてみた顏見合せて笑ひました。初午の日はお強飯が出ました。子供連はこれがほしさに閉場まで殘つてたんだす。

清八 その後から押しよつたのは三味線の才六やつたのと違ひますか、えらい氣かぬ氣のやんちや坊主やつたさかい……

彦六座と盲人住太夫

木谷　彦六座は明治十七年一月に、座元が二代目の柳適太夫で初開場したので、一座は初代の柳適太夫、組太夫、春子太夫、三味線は廣助、新左衛門、廣作、才治、人形は東十郎といふ顔ぶれでした。

綱造　彦六座は博勞町のお稲荷さん（難波神社）の境内の東北の隅にありました。北門を這入ると、細い板石の路次があつてそれに面して西向きに立つてゐました。小屋の前にはぜんざいやとか壽司屋とか小鉢やなど食ひ物店が列んでゐました。

清六　小屋の大きさは、あれで大體文樂座と同じぐらゐやつたでせう。但し舞臺間口は同じでも奥行はさらに淺かつたかも知れません。客席の數はどうでしたやろ……

山城　御靈の文樂よりやゝ少かつたかも知れませんね……

木谷　彦六座は旦那衆の道樂商賣のやうなところがあつて、お客へのサービスがよかつた。土間へ薄べりを敷いたり、それまでの昔の文樂ではお客に下駄や雨傘を場席へ持つて行かせたのを彦六座ではこれを下足番が預つてくれた。客の下駄の汚れまで洗つたといひますが……夏芝居には客に團扇を出しました。このサーヴイス振りが評判でした。そして、この彦六座が大阪の中心の船場へ出來たので、當時松島にあつた文樂座が少し市の西に寄りすぎて地の利がなかつたので、この彦六座に刺戟されて、これに對抗すべく松島から同じ船場の御靈神社内へ移轉したのです。それが明治十七年の九月興行だつたと思つてゐます。要するに彦六座の評判が御靈神社内へ文樂を移すことになつた直接原因なのでした。

清八　さういふと、えらい文樂座は客扱ひが悪かつたやうですが、文樂には偉らもんの「おいえはん」がゐやはつたから、この人が采配を振つて表方やお茶子はんを監督して、愛嬌を振りまいてはりました。決してそんなことないと思ひますが……

山城　彦六座が出來た二年目に住太夫や團平師匠が文樂から彦六へ移られましたのでしたかな。これにはこんな話を聞いてをります。明治十八年に文樂の一行が東京の猿若町へ乘込んだ時、みんなは東京へ到着したが大掾師匠（そのころは越路太夫）だけが東京へ行く途中横濱へ立寄つたのです……何分當時は花形の越路太夫なので座元がその乘込みの時「越路さんが横濱からお着きになつてから手打ちを致しませう」といつた。すると四代目の盲人住太夫さんムツとして「越路が來ないので手打ちが出來んやうなら、私などはゐてもゐなくてもよろしいのでせうから、これで大阪へ歸らせて貰ひます」とおつしやつた。すると、これに續いて廣助師匠も「私もそんなのなら別に東京で打ちたいことおまへん、大阪へ歸ります」と座が白らけてしまつて一悶着起りました。なるほど越路太夫は當時の文樂では花形の寶物でしたでせうが、顔付けからいつても藝からいつても住太夫さんのはうが遙かに上だつたのですから、これも尤もな不平だつたのでせう。結局、この東京での悶著などが直接の動機になつて、その後に住さんと團平師匠とが文樂の敵方の彦六座へ變られたと聞いてをります。それから、當時私は七八歳でまだ東京に居りまし

たが、この時の猿若町の文樂を見物に連れて行つて貰つたのが、私の文樂を見た初めでした。何んでも雪の降る中に孟宗竹が澤山立つてゐたことだけが子供ごゝろの印象に殘つてゐますが、これは「廿四孝」の筍掘りだつたわけで、その時の太夫は法善寺の津太夫、三味線は才治さんだつたやうです。太夫も三味線も大變上品な人だつたやうな記憶が子供ごゝろにありますが……

明樂座の位置と客數

綱造 彦六座は文樂座と競爭せんならんだすさかい、客扱ひがよろしうおました。客席もよろしうおましたし、太夫、三味線の顏ぶれも文樂よりよかつた。けど、やつぱり客の入りが悪く、一興行三日間だけで打上げたこともあるし、これでは食ふて行かれんいうて、三味線彈きが三味線箱をかたげて出て行つたこともあつたさうだす。

木谷 この彦六座も住太夫が死ぬし、火事を出すしで、とう〳〵明治二十六年九月閉座して、翌年の明治二十七年三月に稲荷座として復活しました。紋下は私の父の彌太夫で、そのほか大隅、新靱、春子、伊達（後の土佐太夫）長子（後の彌太夫）七五三、三味線は團平などゐましたが、しかし、これも團平が死んだりして、僅か三四年で沒落したわけです。そしてその殘黨の面々が、これでは食つて行けないといふので、今度は堀江の明樂座に立て籠つたわけになります。この時の面々は紋下が大隅で組、春子、伊達などがゐましたですな。

明治十七年九月御靈文樂座初開場の時の繪本

清六 明樂座の場所はたしか、宇和島橋の……

木谷 えゝ、今でいふと宇和島橋南詰の一つ南の筋を西へ入つた北側の角でした。えゝ私の生家のてうど向ひ側になります。

綱造 明樂座は堀江廓内のホン小さい小屋でしたな、昔は新派旗上げ時代に一時、角藤定憲もこゝに根城をおいたことがある由緒の小屋ですが、そのころは枝芝居や仁輪加がかゝつてました小屋だす。お客席はせい〳〵二百ぐらゐでしたかな。

木谷 しかし、こゝも長續きしませんでした。あまりにも小屋が小さすぎるので……それで今度はそこから少し東に當る市の側の堀江座へ移りました。即ち宇和島橋南詰を一町ほど南へ入つて東へ折れた北側で、小屋の表は南向いてゐました。この時は大隅太夫が既に文樂座へ移つてましたので、春子、伊達、長子、此太夫らで、紋下は小住太夫といつてゐた木津谷吉郎兵衛で、舞臺へは立ちませんでした。柿葺落しは明治二十八年九月やと記憶してますが……

清六　明樂座と違つて堀江座は立派な本芝居の小屋で、舞臺間口も約十間はありましたでせう。

大隅　花道もありましたな……でも、そのころは既に大した芝居もかかつてまへんでした。この小屋は大正十年近くまでありましたな、しまひは空屋みたいで何もかゝてしまへなんだ、時々政談演說の會場などに使つてましたが……

山城　堀江座時代は春子太夫さんが賣出しのころです。例の「酒屋」で……

清八　あのころの春子はんの「酒屋」はえらい人氣やつた。

堀江座時代の春子

清六　土佐はん（伊達太夫）もそのころは、えゝ聲やつたけどな……

清八　レコードに殘つてる春子はんの「酒屋」を聞きましたが、やつぱりサワリはよろしおまんな……

山城　色氣があつて耳ざわりがよかつた。獨特の語り風で春子風やいうて、素人仲間でもよう流行つたものでした。とにかく「日本一の酒屋」といふ評判でしたから……一流の節まはしで、お客はみんな醉はされてゐた。

綱造　とにかく文樂の大掾師匠より春子のほうが評判がえらかつたのですさかい……それに春子がよいとなると氣狂ひのやうにヒイキにしたものでした。只今、文樂の幕内主任してはる八木さんなどでも「大掾のよいのはいはいでも判つてゐる。これは魚でいへば鯛や、鯛のうまいのは當り前やが、春子の「酒屋」は鰯の料理や、鰯は下肴やけど、料理の仕方であんなうまいものない。鯛以上や……」と、えらい肩入れでした。

木谷　大阪の紳士仲間では、武藤山治なども、大の春子黨でしたな……春子のために、特別の小屋を建てる話などありましたから……

綱造　文樂と堀江座と、同じ狂言例へば「忠臣藏」とか「菅原」とかを同時に上演して人氣をあぼつたこともよくありました……「忠臣藏」といへば、春子太夫が九段目の平右衛門を語ると「しばらくお控へ下さりましよう」が節分の一厄拂ひまひよッ」に聞えたり、または千日前や道頓堀で屋臺店の冷しあめ屋の賣聲「一杯が五厘」と似てゐるといつて仲間同士よく笑つてゐたことがありました。

山城　堀江座では七段目の平右衛門は「しばらく〳〵」で花道から太夫が肩衣姿で出て來たものでした。

清六　その時分は、文樂の連中が堀江座へ總見に行き、またその反對に堀江の連中が文樂へ揃つて見物に出掛けたものでした。

綱造　大隅も文樂へ戻り、後年は伊達太夫も文樂入りをした中に、春子太夫だけが「わしは文樂へは行かん、文樂へはいつたら、わしのアラが見える」といつて生涯文樂へ出なかつたのは、自分をよく知つてゐたからで、これは一見識として、やはりえらい人間やとよく思ひます。

木谷　では、このあたりで……

近刊

渡邊　均著

落語の鑑賞

B6型二一〇頁

豫價　六〇圓